

「技手久島の自然と環境を守る会。と横っ腹に書いた関西久志会の黄色い小型トラックに乗って、6年前のある日はしぐっちゃんはシマに帰ってきた。

「久志部著のみなさん、枝手久島を石油企業から守る為に反対に立ち上がりましょう。共によう為に関西からハシグチトミヒデが帰ってきました。」

マイクで呼びかける小型トラックの回りに、技手久島地主のじいさんばあさん達が集まってきて手を取り、涙を流して書んだ。

「トミヒデ!よくぞ帰ってきてくれた。わしらはやるだ」

この時から誘致系の壮年ボスに牛耳られて立ち上がるに上がれないでいた、平均年齢10 才の久をの反対系は立ち上がった。強ソレはあど何年で死ぬだろう一賛成派が地主たちの死亡リストを作っているという話をきいて、じいさんばあさん達はイカッた。

「この斗いに勝つまで、絶対にわしらば死なん!」

つれあいのキサおばちゃんを尼ヶ崎に残して光にし人シマに帰ってきたはしぐっちゃんの、一身を投げ出した斗いが出まる。

じいさんばあさん達の為に血圧測定から、名瀬への軸ごました買物から長生きする為の早料体操から、枝手又島での女に事業である養鰻まで、そうした斗いの表裏細部の一切合財をはしく、ちゃんは電身を惜しまず献身的に菌倒みてきた。何度も命を狙りれた。久志の勢致派にしてみればこんな増ったらしい男はおらん。こいつさえおらねばなんとか久志も"サンセー 派部落』のカンバンをあげられたものを。おかげで親族血縁をまっぷたつに製いて、白と黒の如く久志部落は劇れてしまった。久志の寺を占める反対派地主に支持されたはしく、ちゃんの区長を賛成系はどうしても認めるかけにはいかなかった。区長は2人にしよう、イヤこうなりゃしなくったっていい、村役場ばイコットだ、保険金ももりん―と反対派のからたが区長になるまでの一年ばかり、久志部落はもめにもめた。久志の小中学校に通う誘致派の3世たちにツバをひっかけられた事もある。これはあんまりひどいので投長に、ナンタルコトカ」と申し入れ上めさせた。シマに帰ってから3ヶ月めの村

長起て、誘致米現村長に対抗して反公害甲検村氏念譲が立てたのははしぐっちゃんだった。 と言うより絶対誘致確実のこの村長途に敢えて立候補しようという着がおらず、ギリギリのギリにはしぐっちゃんが「しゃーない、ワシがやる」と動きだしたのだ。 賛成系の執拗な選挙妨害、イヤガラセ、反対派内のやっかみ半分の誹謗に負けず、大アワテで背広をつくリネフタイを買ってられまざればシンドイ立候補のまね、たにのったのだった。

枝手久島サル飼育問題があこった当初は尼ヶ崎に117を出まと深入りするつもりもなかった我がシマのゴタゴタも、お次に枝手久島石油企業侵出計画ときいて黙っていられなくなった。東里燃料和歌山工場へ見望に行って通り一遍のお参りにすませず、公害の出る事を知ってから勉強し企業の実態を知れば知る経コリャタイへンダ!とただ事ではすまなくなったが、とある人より「ここ(関西)にいていくらやっても犬の遠吠えですよ。誰か現地に帰ってやらゆれずダメですよ。と言かれてもちまえの情熱と曲げるに曲げられぬ正義感のなせる技か、「まさか自分が」と思っていたその「ませか」に踏み切ったのが運命の別れ道だった。

「カレには久志はふるさとみたいな気がせんのんや。3女の頃あった西表や台湾の方がなつかしいもんなあ」

とはしぐっちゃんは言う。

すぐうしろに山を控えた久志には耕す土地もなく、久志 ンチュウは皆目の前の湾に浮かぶ技手久島まざ舟をこいで 渡り、芋畑を作った。今では戸数かずかに40戸、100人に満 たない過疎の部落だが、かつてはこの小さなシマに140~150 戸もの家があったというから驚く。いかにして食っていた のか? 男たちの多くは妻子をシマに残して、遠く海を越 えて出稼ぎに行った。カッオ船に乗った者、マレーシャで



通訳をしていたもの、満蒙開拓団で行った者、ブラジルで行った者、カッツの炭粉に行ったもの……10年15年とめったにシマへ帰る事もなく男だちは動きに働き、女だちはシマさる 彼を生み芋を作って育てた。一出稼ぎ部落、と他部落よりべかにされたというこの食しいシマの中でもまた一段と貧しかった彼の一家は、彼が3つの時食える土地を求めて八重山へ行った。枝手久に通う舟も持てなかった彼のおっかさんは、毎朝島へ行く誰かいい類んで便乗させてもらい、昼飯には部落へ帰る舟を尻目に自分のオッパイをのみてつ地を耕したという。そのおっかさんの意地と貧民の底辱の思いを、はしくっちゃんはたっぷり受けつしている。

八重山は石垣、西麦、そして台湾に幼少時を暮した彼は、そこで「よそもの」の悲哀を味わう。

「オヤジが生きとった時はよかったんや。……オヤジが死んでからオフクロはうちに帰ってきとってから、毎日近きよったもんなあ」

「よそもの」のつらさが身にしみで彼は自分は決してそのような事はせんだ、と心に決めた。

オタオタせず、自己の全責任において即決、じいさんばあさん蹇を設得して若い守力を 渇望している久志に、何者とも知れないヒッピー国情の私たちを剣ナ入れてくれたのは、 まさにはしく、っちゃんだった。

いっちょうらのつもりでインド服を着こみ、ターバンまでまいて、インドの香を焚いてインドのカネをチャリーンとやり、集会所に居立ぶ久志地主会の一同に御教授申し上げたポンの為に、あとではしくっちゃんは「とんでもない」と眉根を寄せるじいさんばあさん養をどのように義得したか。

「ボロは着てても心はニシキ。人は見掛けじゃない、とにかとあればないであない。アレはインド式なのだ。インドの正式のいっちょうらなのだ。インド式にちゃしんとアイサットものだ」

はしくっちゃんの尽力なくして「無我利」は存在しなかったのであった。



エキャンーシマに来た当時2才の娘の万葉がまりらぬ古で呼びだして以来、彼は私たちにとってはしく、ちゃんとなる。

本名 橋口富秀 当年5月十一といえば私にとってはオヤジ、オフクロの世代だ。ちなみにはしく、ちゃんの次男坊と私は同い年である。青春時代を戦争のさなから過ごし、終戦後に結婚というケースだ。はしく、っちゃんは18の時に海矢団へ入団、終戦までを海軍で過ごし、その間もやっぱりいばりちらす気にくめん上宮を仲間と一緒に海へ放り込まうとした事などあったが果たさず、久志に復員してきて青年団長を2年やった後キサおばと結婚した。長男が生まれてから一家してお頼へ出、2年後には「人外縄へ行って米軍基地のサードマンになった。

はして、ちゃんもまた、帰って来なかったオヤジ、の一人になったかもしれなかった。「オレはもう帰らんび、いうつもりになった事もあるんや。いろいるスト達しがあって腹立てて食送らんかった事もあるしな。やっぱり3仗が可愛いからなあ、そんで帰ったんや」キサおばは食べる物も食べないで名類のあちこちを転々とし、2帖の部屋に子供3人と墓していたこともある。3人目の3仗が生まれてちヶ日の頃から、キサおばば何やら得体

の知れない病気(何し3徹底的医者嫌いで絶対医者に行かない)になり、徐々に悪化していってとのうち足がしびれ歩けなくなる。

「うちの病気はアンタのせいやで、いうてなうちはオッサンドいうでやるんや」

今ごもその頃の話になるとはしぐっちゃんとキサあばまもxる。ガードマンは7年半続けた。

再び名瀬の家族の元に帰って来た翌年、一刻またり崎へ移って行った。

尼ヶ崎センソクーはしぐっちゃんが尼ヶ崎の化学工場で働いて得た最大のもの。無理に無理を重ねて働いたおけて意識不明になってぶら、倒り病院に担ぎ込まいた。尼ヶ崎に来て7年目の事である。それが最初の発作だった。

| 年間失業して「遊人だ」後特殊鉄鋼などの工場で働き、同じシマ出身のS 氏の工場を ケンカしてやめた頃がちょうと枝手久島サル飼育問題の起きる頃だった。 そこしらが重な って転換期となった。

をいこしてもちのオニしてがうりと方向転換できる程情熱的に生きている人がオヤシオフクロの世代にいるというのはおもしろいことだった。私の知っているちの代はみんな何らかの形で開が重く、すでに人生の方向、考え方も固まり、失けみえているといった型の人間はかりだったから。自分が「よそもの」扱いさいてした頃のくやしさを覚えている彼は、私たち | 人 | 人に対して細やかな配慮をたいなかった。初めて会ったその日から「ミオ、リんごむ、てきてくいっか」なんだと試しかけてきて、気が一人と私と同い年の見るがいるなんで信じらいは、経験通に対等なつきあいをしているのだった。

私がシスに来た日、新しく来た者やお客を翻廻するシスの習りして、タ方から反対系がまだ何もないかランとしたうちに集まり、全を出しあってお菓子や飲物を持ち客り、初めて「ムがり」、受け入りの集いを開いた。その席上ではしく、っちゃんはじいさんばあさんを紹介して言った。

「シュの人たちはみんなロベタで無愛想にみえるけれど、一旦気ナンりてくれいばみんな 親切なもんやから」

また別の時

「信頼を得るのは時間がかかるけど、信頼を失うのはアッという間や」

とも言った。しかし実際はたくさんの行き過ぎやワカケのイタリや混乱を、はしく、っちゃんというクッションを挟んでじいさんばあさんたちはかマンしてくりたのだった。



「ハシグッチャンとケッコンしてハシグッチャンのムスメさんになる」

近頃でこそ金次郎うじ(ワーナ)やぬびつじ(ワヨオ)にくらが乏し気が多くなってきた万葉だが、シマに来てからの2年間はずーっとはしく、っちゃん1本だった・続く宇肇、ひかりも「ハシッタン ハシッタン」とまったく同じ様。そのうち維摩(4ヶ月)もああなるんだ3つ・息子たちの動行からして発をもつのはまだまだのようなはしく、っちゃんも、今やムガリの孫ともにたからいて「じいちゃんいうて呼ばそうかナ」などと鼻の下をのばしかけて1、13・ところがお々欲になるにはまだまだ血の気が多すぎるハシッタンなんだなあ。

「今でニをナンヤけど、若い風はカッカくる質でなあー」

今でこそググッとこらえ、即反省し、そのテに乗るかと排発を退けるコトモできるようになった、という事である。私たちの来た当初でさえ、シマでピンボケのトップクラスをしくじいさんをからからと此りつけているところや、同年輩の誘致派と道で大声で言い合っているところなんかを見たものだ。

あちこち転々とさまよい、再び帰って来たシマから

「50才以上のヤッラおみな死んでしまえ!」

とタンカをきって二度と帰らぬつもりであっ出たのは25才の時だった。それから三度もう 土地もはいシマに帰って来たのも、かつて「死んじまう!」とあびせかけた人々一一今では70、80のじいさんばあさん――「こあの時の傷いをする為、なんだとはしく、っちゃんは想ってもみるのだ。

シマで青年団の団長もやったはしく、っちゃんは、その頃めずらし、硬派で、うた三味線(モテる条件)にそっぽをむき、にもかからずよくモテたが、イロケはぜんぜん出す。



古いシマの暗闇を一刀両断するひたすらたる理情神の追求させって、曖昧なもの一切、迷信、ケンムン(カッパ、ヤマノアニキ)、ユーレイの類に真っ正面から向かって行ったのだった。彼の同年輩さも今において軒並みてンムンヤタタリ、吹文の力を信じきっているシマで、それも30年前に「そんなん嘘も

と言い切る着はいなかった。断信する以上ケンムンやユーレイが出るとういけさいる場所には、必ず確かめに強った。

「そんだもなあ、やっぱり恐い中あ、髪のもが逆立ったもんなあ」

磐の毛を建立てつつも踏み止まって正体見極めるこのしぶとさ、強情さ、勇気。 この 道をダダダ ……と行って今彼は日本女産党員になった。 暗のケンムンをあばく精神の 順結である。

私たちがシマに入って来た初めの頃、はしぐっちゃんは「お互内政于海はよそう」はん て言ってした。ところが当初はムガリもガタガタで何事も遅々として進まず、人間関係の もめごとでいるいる修羅場を演じていたが、そうした私たちを見るにつけ、ま見ちゃおり ん程ひどかったせいもあるが、「もっと早起きせエ!」「もっと家をき出いたせエ!」「 夜は静かにせんと年寄りが寝られん!」「PLでもおんたらの仲間といえるんか!?」と部 落さいろいろいかいている私たちへの批難の1つ1っをはしく、っちゃんま「直さにやけ ン」と包み隠さず言ってくれるにとどまらず、「それはあんたたちの理想から外山とるじ やないい!」なんてカッカして言うのだから外政干渉もいいとこだった。そこが老婆心を こえてはしぐっちゃんのステキなところだった。とっかえていかえしろんな都会の若着産 が来るのだから、言いいた事もいかっちゃしるけどなかなか学りきいず、私自身うんざり する程継然としてバラバラなムがりだった。ムがりのみんなにとけこめず自閉的で不満た らたらだった私ははしべっちゃんに「あたしだって仲間とはしてないよ」と言ったりして はしべっちゃんの方が「ミオは誰かに不満があるんじゃないか。なこかあったんじゃない か」と心配する始末だった。もう内政干渉を連り越して深入りだった。内政のアラを見せ 合うこと、仲間と自分自身をも裏切ってゆく者に対して女に怒り、悲しむことのできるは し、ちゃんの真摯さ、それは私たちにとって新鮮な刺激という以上のものだった。

後は私たちの足だを見ている訳だ。彼を納得させらいないで誰を秘得させらいるだろう。

はしぐっちゃんはコミューン・ムガリの、歴史の証人、なんである。

以前はして、っちゃんは私たちのことを「トロッキスト」と言ったりしていた。日本共産党員としての悪口だ。そのうちをW越り消す、と彼の方から言いだした。今ではワカゲノイタリノ理想主義的カゲキ派くらいにみているみたいだが、そこで決裂しないところがミッである。

私たちとはしくっちゃんの間が険悪ムードだったのは3年前の久志ごの技手久祭りと、それに続くはしくっちゃんが立候補した

村議選のあたりが最高潮で、お互に「ナンダ・はしぐっちゃんのヒステリー」「「年位様子をみてこのままだとムがリには出てってもらう」なんだとイライラしていた。ムがりも最高時60人の祭り目当てのシッチャカメッチャカなお客を抱えこんで、ないがなんだかりからんままにヒイヒイと模索していたのだ。選挙そのものが熱気と興奮渦巻く祭りより祭りみたいなもので、ムがリの「人」人にはしく、っちゃんは議論をふっかけ言い合いをし、泣きだすすの子もいたり、ないころシマ中異様な雰囲気だった。

はしく、ちゃんは甲様村初の日本女産党村会議員として見事当選し、ムガリも抱えていた混乱と危機を乗り越えて、その後はお互切っても切れない絆を太くしていったのだが、その最悪の時においても私たちは全面的に選挙活動に協力してつ、日英の選挙屋としてや

って来たし人の党員とはしく、つちゃんの明らかな達しを見ない歌にはいかなかった。

ブタミソというのがその人につけらいたアダ名だった(悪児島料理のブタミソが「好きだったので)。彼は選挙中はしく、っちゃんのうちに泊りこんで、黒ヨミヤら活動やらに手腕を発揮し(事実彼の厳正なる票ヨミで、「悪差で当選だったのだ)、ムがりの女の子達しな代で飯作りなどの選挙事務接待につとめ、つまみ食いをゆらって入りでたり、それなりにその人とつきあったのだ。

「このたび日本女産党はハシグチト」とデを立候補させました。どうかみればしよるしくお願いします」と「トミヒデュニンはおんな目ン玉に入いても痛くないと言うてあるよ」というじいさんばあさん達に向かって口上するブタミソさんには、どうしても反発を感じざるを得なかった。ないと言うとんじゃい、かしらのトミヒデを―。その感覚の相違を他たちは今でも大いに問題にしている。なんではしく、っちゃんとじいさんばあさんたちの間に選挙をさんが一線を引かなけばらないのか。これが必勝のシステムという訳なんだな。このやり方で党を拡大していくかり方の「必勝、なのか? これはじいさんばあさんを 繋づけ、あくまで女にやっていくやり方の「つか? こここそが?マークだ。

組織ギライーとはしく、っちゃんは私たちのことを言うのだ。

「組織がキライヤし、うてあんたたちはみんな言うけどな、組織の力をバカニしてはいかんよ」

またこんな風にしつこく言いはる。

「ワシはまだまだごきとらん人間やけど、日本共産党の達う。日本共産党をみてくださいよ。ワシをみては1かんよ」

「はしぐっちゃんはエライよ・アカといめいても誰にも理解されんざも、コレが正しいと思うことを貫いてしんざがんばってんだもん。だけど日本女産党だって党利党略があるよゆ。政党なんて大組織はゼンゼン信用ざきないよ」

「いやいやそれでは満たならん。もっとアンタ日女のことを勉強してから言ってくれんと」この論幹は果てしなく続く。夜遅くまで大声出すな、というはしくっちゃんの声のでかいこと、とちらも譲らず、切らず、静めず、時計を見て

「ウワーしまった! 12時間ぎたらオレは掃っかいんのや!」

とはしく、ちゃんが慌ててとびあがるまで続くのだ。それは決して賛成派が手を叩いて喜ぶような代物ではない。口には出さゆと、人間としての尊敬が私たちのなかにはあるから

「日本 支産党は 省乏人の味 がだから、 ワシ は 人党 したん や 、日本 女産党 が嘘を つく 党 やった ら ワシ は か か る ワ 」

これだけざれたちには十分なのだ。

「もし日女が牧手久にCTSをつくる事を認めた



らどうする?」

という反公害甲戌林民会議の席上でのポンの問いに対し、はしく、ちゃんはキッパリ言ったものだ。

「その時は私は日本英産党をやめて、反対運動を続けます」

おとは日本共産党がウィフきか否かが問題なのである。私たちが具体例をもって「日女



はこういうまかしてい事をしてる。例2は全出湾で埋立てという要様な既成事実を作った企業に対して、それはもう承が事でしようがないなんてことを言ってる、三里塚では日本山砂法寺を外にこういう裏切りをしてる。これはどうしつコッチャー」と迎るつと。

むはしく、っちゃん。はしく、っちゃんの情報源はおおむゆ、赤旗」のようだが、「赤旗」だけに偏らせないだけの多様な地域斗争の生の声を、現物を、一緒に学ぶといった私たちの姿勢ともっともっと徹底しなければならないと思う。

むろんのことはしくっちゃんには一片の権威主義もない。

「オエライさんを見るとムヤーッときて、ナンヤコノヤローしう気になるんや」 彼は日本英産党をピラミッド型組織とはみていない。

『もっとも優秀な日本英産党員――宮本顕治下リて学ぶべし。とはしぐっちゃんのことを 書いたホンの文を読んで彼け言ったもんだ。

「ポン、こういうことは困るなあ、宮本顕治はヒしくて、ここに来るんはとっても無理なんや」

はしいっちゃんはあくまで現実的かり具体的なのである。

私たちはホンネとタテマエがまったくしつであるという線コ肉迫しつつ批判しあうが、 それを支えているのはあくまで強制しない態度である。例えば私たちははしく、っちゃんが 病気だとか用でできない時は、午後ち時に来る2番バスにのせてある日曜版赤旗を彼に代 いって受け取りに行ったりもするのだ。

私たちだ「ヒッピー」であるうと「カイキ派」であるうと考え方の違いはせておいて、一緒にやっていこうとする一貫した姿勢ははしく、ちゃんの度量の大きせだし、はっきりした見体的ヴィジョンへの情熱なのだ。一緒にやっていくどころか、78年第6回校弁久祭りの『九川琉球弧佐民運動連帯の海のシンポジウム』の席上ではしく、ちゃんの話が一番具体的でショッキングであもしろかったのは、ムガリ=よそものし対するそのものズバリのプロポーズだったからだ。

「もっともっとひがりの人たちが増えて、一緒に生産女同組合を作ってシマゼもこうして

やっていけるんですよ、と証明してやらゆばいかんのですよ。若い人のからんシマでこうしたムかりのような人達をどんどん受けるいていけなくては」

こりゃあ光来なことだなめ……と耳とばだって、私達は一様に感じたものだった。

ワシらは革命しようとしているんや――とはしぐっちゃんは言う。はしぐっちゃんが「革命」なんてコトバを使うとゾクゾクしてしまう。

「党中央でいからんことは、地域からいしらが変ラフしかんとアカン」

佐辺から日共もまた自己変革していかいばならないということを、一片も卑屈さのない はしく、ちゃんは現象的具体的に自分のものとしているのだ。

彼のいう革命とは、私たちのいう革命と同じく日常茶飯事なのである。

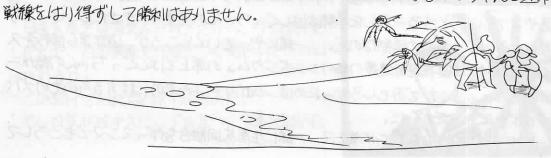
私をちの日常にあるのは目前の「敵」だし、未来のすべてを賭けた斗(1と試みなのだから、問題は「ヒッピー」「ヤナギ系」「日本共産党員」なんだしこだめるのだはなくて、ひとりひとりの人間に興味を抱しているかどうか、お互を根本的に信じられるかどうか、 女に斗えるかどうかというところにかかっているのだ。という以上に、私たちはすごにあらず淡寒不可欠な存在になっている。「ヒッピー」と「日英党員」の違いなんて二の次の問題、私たちし人し人がイヤが応ごもガンバラなくっちゃダメな現実を前に、いりは消化不良の民みたいなものなのだ。たかが「路線」の違いでセクト争いする訳にはいかないりだ。

確にはしく、っちゃんは日本共産党の論理をもって現実を把握しているし、私にちは又はしべっちゃんのいかゆる「理想主義」的理念をもって現実を把握している、というところでお互に「あんた達のやりかでは大多数の人間を変えていけませんよ」「はしく、っちゃんは赤旗しか読まんからョ」と内心「甘いんだから」と思いあっているのだ。

しかし抱いている危機感は同じだ。めいわいがからんで誰がやる!? 誰にも甘ったいてなんかいらいないのだ。

「ガンジーをみなさし」よ。国成の女たちのようにこの体をしよって、非暴力では、やってしかんと離もついてこんよ。子供をおぶって斗えるような斗をせんとアカン・アンタらだけが浮き上がっちゃあいかんのんや」

そうざす、はしく、っちゃん。あくまで私たちははしく、っちゃんと、じいさんばあさんたちと女に斗うのです。1歩1歩の階段を踏んでいくつもりです。そのようにしてしかお互の革命はあり得ないし、未来の一切たみえはしないのだから。はしく、っちゃんと運命共同戦後をはり得ずして勝利はおりません。



終めりに

一覧を、去年とはしくっちゃんは再発したゼンソクとの当に明け暮れた。ひどに発作が続いてとうとう名頼の病院に入院という事になり、賛成派を割ばせたくないのとじいさんばあさん産に心配させない高、ナイショで私たちだけ入院の準備を手伝った。

「オッサン、アンタが死んでもうちは墓参りはようせんからな」

と言いつきせおばは入院の支度をした。キサおおこしてからが歩けない意成葉杖をつく」
て外に出る事も滅効になく、「年のほと人とを家の中に居続けだ。今この人に倒れられてなるものか、私たちにできる事ならなんだってやる、と祈るような気持ちの日々、今まではしく、ちゃんに甘ったいてたくさんの事を負わせっ放してきてしまった、とつくづく思った。

(おくっちゃんは、自分がこんな体でなけりゃ、もっと時間があいば、じいさんばあさん産に指圧してやりたい」と言う。誰としば高こりがひどい、とよく知っている。じいさんばあさんを喜ばそうという事に関して彼の頭はいっち働いているし、東際東に細やかである。「人」人の血圧や健康状態を知っていて、無理せんでええ、と怒るし反面来して年曜はないもせんで、いいなんだと年寄扱いしたりはしない。やいるだけのことをやってもらう、という訳でおくまで一緒にやろうという姿勢である。近頃は「人」人をこっそり写真に撮って、集会の時にスライドで見せてやろうとかろき持ち歩いたりしている。

私たちも血圧測定や指圧やか仕事の手伝い、生産女同組合のホネとなることなどでるべきことはいくらでもある。私たちし人し人がもっともっとじいさんがあさんの暮らしを知り、入りこんでいき、はしくつちゃんを通さないもっとストレートな関わりが多様に発展していくことが、はしくつちゃんの荷を少しても軽くしていくことなのだ。

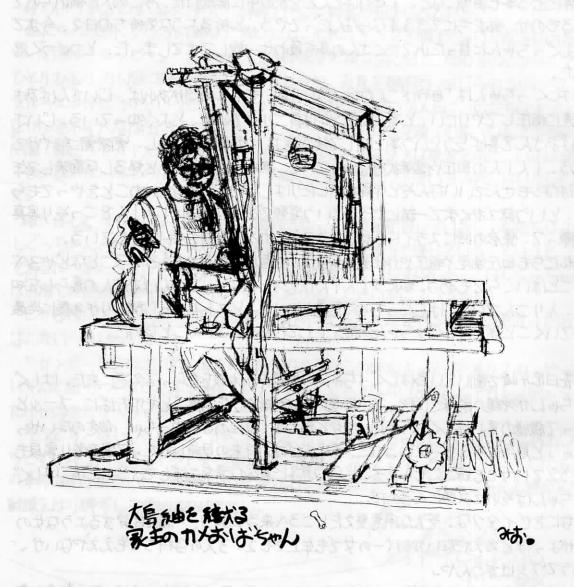
先日尼ヶ崎で働いているはしく、っちゃんの長男坊が休暇をもらって久志に来た。はしく、っちゃんが沖縄へ出稼ぎに行っていた頃の思い出話にひたる息子とキサおばに、ブーッと怒って機嫌の悪いはしく、っちゃん、何かと思えば、根性のないやっちゃ、信念のないやっちゃ」と見子に腹を立てているのだ。キサおばは、将来の見通しもたって家も借り家具もそろっていつでも嫁さんもらえる、という息子に喜びの家をこぼしているのだが、はしく、っちゃんはちれて、又頭にくるのだ。

「なにをゼイタクな。そんな用意整えたとこ3へ来る女より、一緒に苦労するような女の 方がよっぽどええやないか。バーの女でも年上でも2、3人の3持ちでもええやないか、 いうてワシは言うんや」

そいですけおばとまた戦争。 私たちなんてはしく、っちゃんがオヤジだったら軒立み勘当娘に勘当息子の集団だけど、そこらへんではく、ことはしく、っちゃんに近いのだ。まったく出合いとは不思議なものだ。私たちは私たちの親に何もしていないし、はしぐっちゃん

は彼の息子・娘にここで斗うことは事符しない。「女斗」ってのはこんな奇想天外の人間の結びつきによって蘇生するものなんだな、きっと。

やって来11、女よ、男よ、子連小一匹狼よ、こここをアナタを必要として113のだ。スーパーマンは | 人もいない。出合いこそ革命への第一歩。 ざはいはしぐっちゃんともどもアナタを待っています。



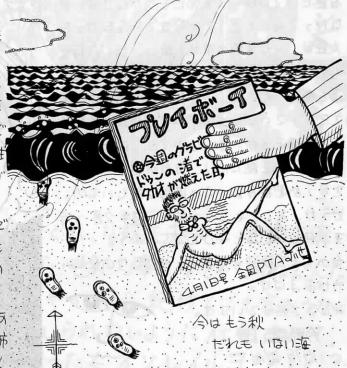
人によって個人差があるので、いちがいには言えないが、ぼくの場合を一つの例に取れば、3.4日の週期ご般間に指が走りだす。 しんぼうして一週間。 90日間の備蓄なんて、とてもできかしない。

ムがり道場へ来てからは、直接視覚に必び込んで来る刺激は大幅に減少したとはいえ、それがかえって精神的后必躍に結びつき自然のふところに拍かれる事によって、大いなる甘え、安心感、そして満足感となり、さらにそれらが時間的にも長期にわたって継続するようによった。 まことに男の生理とは、たくましくも不思義なものではある。

具体的に例をあげて説明すると、今までは一つの対像を決めて指を走らせていたぼくだったが、その対像はたやすく手に入った。 週刊紙をめくると引張で裸みぬえちゃんが唇を聞きお吊を持ちあげているし、テレビをつければ不健康をうなかりイ子なゃんが個を高ってくる。 そして街を歩けば日季ロマンポルノヤ日本すもう協会のポスターが自冒道々と貼られているといったぐあいである。

ひと見のほり時期に砂束へ行きせえすれば、吹ず裸のねえちゃんが一人で濃ころんでいる んだと思いこみ、思いかこせば野和42年。 夏のせかりも 過ぎたころ、遠い才ホーツクの 空の下、一人の多感 は少年が期待にはまま市として、満ちては引き、引いては満ちる、要 の間に間を、終り歩きつづけ、夢を追いつづけた事をフレイボーイの編集長は知っている にごうか。 後に少年はこの教訓から 共海道では寒すぎるめだという 結論に達し、南の島

き夢見る青年へと、此長して行く。 そんな青年がムかり道場へ来て知った 事は、雑誌といえばミニコミばかり、 テレビではNHKの天気予報のおりち やんと商みしりにはるしまつだし、さ らにここの部落では2名の例外をのぞう き中学を卒業してから30代までの女性 は『魔の空白地帯・謎のバーミューダ 一海域」となっているあります。 2名の例外といえと"もミオとポン子で" どれぞれポンとりレフと夫婦で母でも ある。ぼくにしてみればここでの 生活の よき先輩、助信者であるが、 ロうるさいであねき由と言った方があ たっている。マタ人によっては、姉 せんがいい。姉さんが最高という人



もいるだろうが、そんな人こそ一度おとずれてもらいたいものである。 と、いうわけでムがり道場には刺激がない。枝手久島へ行けば一生不犯だと思えばあには からんや。 対像が今までの小さな一つの点から大きな広がりを持ちはじめたのだ。

受辺に出るとプルン、プルンした海だ。 解び込んでもはじかれそう。砂を一握り。 この砂と、あの満天の星たちとどっちの数が多いかなアー。 なんて考えながら発射台の レバーを握ぎるう。 オット砂をつかんだ逆の手で。 先人の言葉をかみしめて、私読み 開始だ。 『我々は月へ行かねばならない 凶(ジョン・F・ケネディ)

そうして、ぼくは海にはじかれ、虫にちゃかえるのオーケストうき引きつれて、無数の星々の中へと、つき進み、すいこまれて行くのでありました。 イャー いがったー。

しかし、これも無人島、枝子久島で夜一人の時間を持て巨田の事で、久志のムがり道場では、2家族と独身男性4~5名が2軒の借屋に、ささり込んでいるので残念ながら、心から星へつき進める時間が持てない。 便所は香りがきつく、いまぢねえしょんがこの壁を史き破るのは至難の技である。 又外へ出て事をすますのも、ハブは温度差に非常に敏感で熱を発するものに促びかかる習性があるので摩擦する事により引き起こされる悲喜劇を考えると、思いとどまざるを得らい。『独身者に一人一室、星への発射台をお

これは、今の4がり道場にとっては高い望みではあるが、久志の家の使っていない空間をもっとうまく利用したり、もう一軒借屋し、そ二は食単、台所、風呂場、洗たく場后どをふくめた集会場とする。 又枝千久島に新しく小屋を建てたりする事によって少しづつ近づいて行きたいと思う。 そうする事によって、我々やこれからおとづれるであるう独身者達だけではなく、夫婦にも気がねせず、夜の営みを心から楽しめる 境を持つ事へ、つ

ながってゆくと思う。 今まで知らなかった 人達と、一つ屋根の下で、喰い、話し、反発し、大きにれ、子供をあやし、洗たくし、 適を飲み、ねむる。 そんないがの魅力のできずってはあるが、そんな中でも ボケーッるが、そんな中でも ボケーッるかい 本き読んだり、自分の持っているかいを見りめ把握する一人の時間も欲しいもの。 どうか、 あんたもここへ来て、 枝手 久島 かまんたと喜びを分ち、 ストース

女の人も大歓迎。 きっと それなりの楽しみ うがあるばず。

みしなで待っています。

野數 記 1979 2/10



